

## はじめに

### 「倫理」の思考力を磨こう

“思想家の名前や基本用語を暗記しさえすれば何とかなる”と思っている人はいませんか？ もししたら、今すぐにでも、このような安易な発想は捨ててください。キーワードには各思想家の基本的な考え方が凝縮されているわけですから、キーワードの内容を理解することが何よりも重要です。この問題集に取り組む際にも、このことを忘れないでください。

### 問題集への“取り組み方”に気をつけよう

大学入試に備えるには、問題演習が不可欠です。ただし、何となく取り組んでいたのでは、高得点は望めません。実力アップを図るためには、以下の2点に気をつける必要があります。

- ① 解答する際に、それぞれの選択肢のどこが正しく、どこが間違っているかをできるだけ緻密に考えること。この労力を惜しんでいては、いつまでたっても本当の実力はつきません。“カン”に頼って解答するなど、もってのほかです。
- ② 答え合わせをする際に、自分の判断基準のどこが曖昧であったかを丹念に追求すること。とくに、“これだ！”と思って選択したにもかかわらず、結果的に失点したケースでは、その原因を徹底的に解明することが必要です。

### 本書を最大限に活用しよう

この問題集は、センター試験「倫理」の過去問をもとに編集・作成したものです。しかも、高得点を取るための工夫がしてあります。各単元とも、「step 1」と、「step 2」からなっています。「step 1」は、それぞれの分野の重要な思想についての基本的な知識をまとめて試すための設問配列にしています。これに取り組むことで、基礎的な力を系統的に養成できるはずで、そして、「step 2」では、レベルをやや上げて、各分野の本格的・実践的な総合問題が取り上げられています。このような“二ステップ”方式を採用することで、より効果的な入試対策ができるはずで、本書を活用して、皆さんが知識のステップアップを図り、自分の志望をかなえることができるよう、心から願っています。

## 目次

### 第1章 現代社会の倫理的課題

<b>step 1</b> .....	8
第1節 人間性の特質…8	
第2節 青年期の心理と課題…9	
第3節 適応と個性の形成…10	
3-1 社会の中でのパーソナリティの形成 10, 3-2 葛藤と防衛機制 12	
第4節 科学技術の発達と倫理的課題…13	
4-1 生命・医療をめぐる問題 13, 4-2 情報技術の発達 15	
第5節 現代社会の変容と倫理的課題…17	
5-1 大衆化・管理化の進行 17,	
5-2 家族や地域社会の変容・少子高齢化 18,	
5-3 ボーダレス化をめぐる問題 20	
第6節 地球環境をめぐる倫理的課題…22	
<b>step 2</b> .....	24
1 デザイナーベビーの是非 24, 2 「不公平」について 30,	
3 紛争と当事者同士の対話 35, 4 テクノロジーと芸術作品 41,	
5 フェアトレードと市場競争 47	

### 第2章 東西の源流思想

<b>step 1</b> .....	54
第1節 ギリシア哲学…54	
1-1 自然哲学とソフィスト 54,	
1-2 ソクラテス、プラトン、アリストテレス 55,	
1-3 ヘレニズム期の思想 56	
第2節 仏教の成立と発展…58	
2-1 古代インドの思想 58, 2-2 ブッダの思想 59, 2-3 仏教の発展 61	
第3節 キリスト教とイスラーム教…62	
3-1 ユダヤ教とイエスの教え 62, 3-2 キリスト教の発展 63,	
3-3 イスラーム教 64	
第4節 中国の思想…66	
4-1 諸子百家の思想 66, 4-2 儒家の思想 67, 4-3 老荘思想 68	
<b>step 2</b> .....	70
1 「知る」ということについて 70, 2 真理の探究と言葉の限界 76,	
3 「生」を律する規範 82, 4 現実社会と「生」の模索 88,	
5 模範としての他者の生き方 94	

### 第3章 日本の文化と思想

<b>step 1</b> .....	100
第1節 日本思想の原型…100	
第2節 仏教の受容と展開…101	
2-1 仏教の受容と神仏習合 101.	
2-2 平安仏教・浄土信仰 102.	
2-3 鎌倉新仏教 103	
第3節 近世日本の思想…104	
3-1 儒学の展開 104.	
3-2 国学 106.	
3-3 民衆の思想・幕末の思想 107	
第4節 西洋思想の受容と近代日本の思想…108	
4-1 文明開化と啓蒙思想 108.	
4-2 キリスト教・社会主義・国家主義 108.	
4-3 近代的自我の形成 110.	
4-4 近代日本の哲学と民俗学 111	
<b>step 2</b> .....	113
1 外来の思想や文化の受容 113.	
2 人間と自然との関わり 118.	
3 他者とともに生きる 124.	
4 先人の学び 129.	
5 有限な生をいかに生きるか 134	

### 第4章 西洋近現代思想

<b>step 1</b> .....	140
第1節 個人の自覚と人間性の探究…140	
1-1 ルネサンスと宗教改革 140.	
1-2 モラリスト 142	
第2節 科学革命と近代哲学…143	
2-1 科学革命 143.	
2-2 経験論 144.	
2-3 合理論 145	
第3節 市民社会の倫理…147	
3-1 社会契約説と啓蒙主義 147.	
3-2 功利主義 149.	
3-3 ドイツ観念論 150.	
3-4 実証主義と進化論 152	
第4節 人間性の回復と主体性の確立…153	
4-1 実存主義 153.	
4-2 社会主義とプラグマティズム 154	
第5節 現代思想の課題…157	
5-1 現代のヒューマニズム 157.	
5-2 近代的理性の批判的検討 158.	
5-3 現代における倫理的課題 160	
<b>step 2</b> .....	163
1 自他の違いについて 163.	
2 理性に対する評価の変遷 168.	
3 時間をめぐる西洋近現代思想の流れ 175.	
4 自然と人間をめぐる知の探究 180.	
5 遊びの意味と価値 187	

## step 1

.....

## 第1節 人間性の特質

問1 人間性の特徴を示す次のア～エの言葉は、A～Dのどれを表したのか。その組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。

ア ホモ・ファーベル      イ ホモ・ルーデンス  
ウ ホモ・サピエンス      エ ホモ・レギオース

- A 人間は知恵をもち、理性的な思考能力をそなえた存在である。  
B 人間は道具を使って自然に働きかけ、ものを作り出す存在である。  
C 人間は自らを超えるものに目を向け、宗教という文化をもつ存在である。  
D 人間は日常から離れて自由に遊び、そこから文化を作り出す存在である。

- |   |     |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|-----|
| ① | ア-A | イ-B | ウ-C | エ-D |
| ② | ア-A | イ-C | ウ-B | エ-D |
| ③ | ア-B | イ-D | ウ-A | エ-C |
| ④ | ア-B | イ-A | ウ-D | エ-C |
| ⑤ | ア-C | イ-B | ウ-D | エ-A |
| ⑥ | ア-C | イ-D | ウ-B | エ-A |
| ⑦ | ア-D | イ-C | ウ-A | エ-B |
| ⑧ | ア-D | イ-A | ウ-C | エ-B |

問2 人間の文化についての説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 文化は、物質文化、精神文化、制度的文化の3種類に分類されるのが一般的である。  
② 文化は、人間によって生みだされ、社会によって共有されたすべての行為様式である。  
③ 文化は、伝達することができないが、それは人種によって規定されているためである。  
④ 文化を意味する英語 culture の語源は、「耕作」を意味するラテン語である。

## step 1

.....

## 第1節 人間性の特質

解答 1 ③ 2 ③

問1 1 ③が正解。

ア-B 哲学者のベルクソンは、人間が「道具を使って自然に働きかけ、ものを作り出す存在である」ことに注目し、人間をホモ・ファーベル(工作人)と呼んだ。

イ-D 歴史学者のホイジンガは、人間が「日常から離れて自由に遊び、そこから文化を作り出す存在である」ことに注目し、人間をホモ・ルーデンス(遊戯人)と呼んだ。

ウ-A 生物学者のリンネは、人間が「知恵をもち、理性的な思考能力をそなえた存在である」ことに注目し、人間をホモ・サピエンス(英知人)と呼んだ。

エ-C ホモ・レリギオースス(宗教人)は、人間が「自らを超えるものに目を向け、宗教という文化をもつ存在である」ことに注目した人間観を示す用語。

問2 2 ③が正解。文化は、特定の時代や場所で生まれるとしても、時代や場所を超えて広がる可能性をもっており、人種、民族などの枠組みを超えて伝達される。したがって、「伝達することができない」、「人種によって規定されている」という記述は誤り。残りの選択肢の記述は、すべて正しい。

## 第2節 青年期の心理と課題

解答 3 ② 4 ① 5 ④

問1 3 ②が正解。心理学者のレヴィンは、青年は子どもの集団と大人の集団のはざまにいて、どちらの集団に対しても明確な帰属意識をもてないために心理的に不安定な状態にあると指摘した。彼は、この意味で、青年をマージナル・マン(境界人・周辺人)と呼んだ。

①「幼児期の発達段階に逆戻りしたかのような態度」をとる退行について考察したのは、精神分析学を創始したフロイトである。③歴史学者のアリエスが述べた内容。彼は、今日的な「子ども」の概念は近代に生まれたもので